実習は、「give　and　take」関係だからこそ、大事！

実習を体験してきたある学生からのメールの中に、次のような一文があった。

「すぐにとはいきませんが、いつかまた会いたいです。住所を教えてほしいと頼まれましたが、学校の実習の決まりで連絡先を教えることは一切禁止なので、それをしっかり伝えましたが頼ってくれているように感じたし、私も実習期間だけで関係が終わってしまうのが残念だったので、教えてあげられないことがすごく悔しかったです。やっぱり何かを通して繋がっていたいですね。」

恐らく、実習期間中は特定な利用者とだけ係わり合わないようにというような実習留意指導を、学生が禁止と受け止めたとしたら誠に残念…。

自分としては、担当制の実習形態であってもいいように思うのだが…。

それはさておき、実習をきっかけにして、人への思い遣りの心を育む過程ことが福祉や教育の神髄であることを、学生も学んで行きますよね。

実習後の繋がりは、学生の責任で行うことだと思う。

もし、過去に教えた故のデメリットの事例があったのなら、それらを紹介してなお、「住所を聞かれたら、自己責任において判断するように！」との指導は必要かなとは思うが。

専門職とは、専門的学識に基づき、自らの判断で業務を行い、その業務に責任をもつ」ことであり、もっと学生を大人扱いし、実習においても責任ある行動を学ぶ機会があってもいいように思う。

一方、自分は多種の実習を受け入れる施設職員であったが、利用者が実習後も学生との繋がりから社会性を広げ、どんなにか癒され、勇気づけられ、また、長年文通や面会が続いているケースをたくさん知っている。

また、施設側は、利用者の処遇を独善で行っているかもしれないだけに、実習生という社会の目は、またとない自己検証の機会となる。

利用者や受け入れ側にも、それだけの大きなメリットがある。

実習に来る学生、係わってもらう利用者（施設）、両方がお互いに　give　and　take　があるからこそ、実習を受け入れると云っても過言でないと思う。

実習に関してこんなに双方に大事なメリットがあるだけに、学生たちが単に禁止と受け取らないように、また、単位取得のためだけでなく社会的意味のあることも理解して実習に臨むように、学校側、施設側にも、更なる説明の仕方の工夫には努めて欲しいと願う。

（2006 年 6 月 24 日　記）